



Title	＜翻訳＞アルムアッラカート試訳（VII）：アムル・ブヌ・クルスウム
Author(s)	池田，修
Citation	アラブ・イスラム研究. 2009, 7, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105889
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アルムアッラカート試訳 (VII)

——アムル・ブヌ・クルスウム——

池田 修*

1.

طَرْفَة Tarafa タラファの مُعَلَّقَة mu'allāqa ムアッラカ訳で触れたように、タラファ (本名 عَمْرُو 'Amr アムル) はラフム朝の暴君 عَمْرُو بْنُ هِنْدٍ 'Amr b. Hind アムル・ブヌ・ヒンド王 (在位553-569) のために非業の最後を遂げた。この王は تَغْلِب Taghlib タグリブ族の族長でもあり、ここに取り上げるムアッラカ詩人でもある عَمْرُو بْنُ كُثُومٍ 'Amr b. Kulthūm アムル・ブヌ・クルスウムの母ライラーを侮辱したため、詩人によって首をはねられたと伝えられている。アムルがアムルを殺し、アムルに殺されたといわれるゆえんである。

アムル・ブヌ・クルスウムがムアッラカを詠んだのはこの王殺害が引き金になったとされている。この一件は『歌の書』(9部 p.182)、『詩と詩人達』(p.117-119) に以下のように伝えられている。

アムル・ブヌ・ヒンド王はある日酒席にはべる者たちに、
 “そのほうども、アラブの中で自分の母を余の母君に仕えるのをはねつけるような者がいると思うか。”と尋ねた。
 すると一同は、
 “おります。アムル・ブヌ・クルスウムです。”と答えた。
 王が“何ゆえか”と尋ねると、一同は、
 “それはこうゆう次第です。まずかのものの母の父は Muhalhil b. Rabī'a です。彼女の父方の伯父は、アラブの名だたる勇者 Kulayb Wā'il です。また彼女の夫 Kulthūm b. Mālik b. 'Attāb はアラブきっての騎士であり、彼女の息子アムル・ブヌ・クルスウムは一族の長です。”と答えた。

そこでアムル・ブヌ・ヒンド王はアムル・ブヌ・クルスウムのもとに使者をたて、王を訪れるよう求めた。また彼の母 Laylā b. Muhalhil には、王母を訪れるよう言いつけた。アムル・ブヌ・クルスウムはタグリブ族の人々を率いてアラビア半島からアルヒーラの都へと出かけてきた。また母のライラーもタグリブ族のラクダ駕籠に乗ったお供の婦人らを伴ってアルヒーラへとやってきた。

アムル・ブヌ・ヒンド王は命じて、都とユーフラテス河との間に大テン

* 四天王寺大学 客員教授

トを建てさせ、王国の名士らを召しだして待機させた。アムル・ブヌ・クルスウムはタグリブ族の有力者らを従えて王のもとへ出向き、謁見の間に入った。他方、ライラーは王の大テントの側の王母ヒンドのテントの中に入った。

さて、アムル・ブヌ・ヒンド王の母ヒンドは詩人 **إِمْرُؤُ الْقَيْسِ** Imru' al-Qays イムルウ・ル・カイスの父方の伯母に当たり、ムハルヒルの娘であるライラーはイムルウ・ル・カイスの母 **Fātima b. Rabī'a** の姪に当たっていた。アムル・ブヌ・ヒンド王は王母ヒンドにあらかじめ侍女らを下がらせておくよう言いつけていた。これは、王が茶菓子求めたときに、ライラーに言いつけて、給仕させようとのたくらみであった。

このようにしておいて、王は食膳を整えさせ、主客がともに食べた。王は頃を見計らって、茶菓子を出せ、と声をあげた。王母ヒンドはこれを聞くと、

“ライラー、あの皿を取ってまいれ。”と命じた。すると、ライラーは、“欲しい方がお取りになればよろしいでしょう。”と言って、従わなかった。王母が重ねて言いつけ、無理強いしようとする、ライラーは、“タグリブの衆、侮辱されましたぞ。”と叫んだ。

アムル・ブヌ・クルスウムは母の叫び声を聞くと、顔面に血をのぼらせて、アムル・ブヌ・ヒンド王のほうに目をやった。そして王の底意を見て取ると、王が大テントに架けていた剣のところに駆け寄った。この大テントの中には王の剣のほかには武器はなかった。アムル・ブヌ・クルスウムはその剣で王の首をはね、タグリブの者たちに命じて大テントの中のものをすべて奪い半島へとひきあげた。そうして本長詩の44-46行を詠んだ。

この詩人は150歳まで生き、イスラーム時代を迎えた、とする信じがたい話が『歌の書』(第9部 p.182)に伝えられているが、おそらく600年頃没したと推定されている。同書(9部 p.183)にはバクル族のある詩人が次のように詠んでいる、と伝えている。

أَلْهَى بَنِي تَغْلِبٍ عَنْ كُلِّ مَكْرُمَةٍ فَصِيدَةٌ قَالَهَا عَمْرُو بْنُ كُلْثُومٍ
يَرُؤُونَهَا أَبَدًا مُذْ كَانَ أَوَّلُهَا يَا لِّلرَّجَالِ لَفَخْرٍ غَيْرِ مَسْئُومٍ

いかなる手柄もタグリブ族に忘れさせるのは、
アムル・ブヌ・クルスウムが詠んだ長詩だ。
彼らは生まれたときからずっとこれを語り伝えている。
ただひとつの自慢話にあきもしないとは、あきれた人々よ。

これは明らかにタグリブ族を揶揄したものだが、同時にアムル・ブヌ・クルスウムのムアッラカが人口に膾炙していたことを物語るものでもあろう。

2.

詩人がこの *qasida* カスィーダを詠んだ契機を、国王殺しと結びつける以上の言い伝えとは違う説明が *al-Anbārī* (885-940) アルアンバーリーや *al-Tibrizī* (1030-1108) アッティブリージーの注釈まがきにのっている。アルアンバーリーはアムル・ブヌ・クルスウムよりも500年後の人であるが、彼が依拠しているのは9世紀初頭の *ʿAbū ʿAmr al-Shaybānī* (821没) の言い伝えであり、無視することは出来ない。その概略は以下の通りである。

Taghlib b. Wā'il タグリブ・ブヌ・ワーイルはジャーヒリーア時代において最強の部族であった。ある学者は、彼らは *Khazāz* の日¹⁾に参戦した。ハザーズとは山の名で、そこで戦闘があったが、彼らは装備、武具、馬、兵らにおいて最もきわだっていた。

Ibn al-Kalbi イブン・アルカルビーは彼の父が次のように語ったと話している。

“私の友人が言うところでは、もしイスラームの到来が少し遅れていたなら、タグリブ族は人々をすべて食べつくしていただろう。”(全アラブを支配下においていただろう。)

タグリブ族の集団が *Bakr b. Wā'il* バクル・ブヌ・ワーイル族のもとへやってきて水を所望した。しかしバクル族はタグリブ族に憎悪の感情を抱いていたので、彼らを追い払った。水を求めた者たちはやむなく引き揚げたが、うち70名の男が渇きのため死ぬという事件が起こった。そこでタグリブ族はバクル・ブヌ・ワーイル族と戦うために結集した。バクル族も応戦する準備を進めた。こうして双方は相まみえるところとなったが、互いに憎しみ合いながらも今までと同じような戦いになるのを恐れ、双方が和議を呼びかけた結果、アムル・ブヌ・ヒンド王の裁定を受けることとした。

アムル・ブヌ・ヒンド王は、

“余はバクル・ブヌ・ワーイル族の男70名を連れてこなければ、その方らの裁定は出来ぬ。余は彼らを鎖でつないで手元にとどめ、タグリブ族の申し状が正しければ、彼らをタグリブ族に引き渡すであろう。だが、タグリブ族が正しくないのであれば、彼らを解放して(バクル・ブヌ・ワーイル

1) *Muḥammad ʿAḥmad Jād* 他による *ʿAyyām al-ʿArab fī al-Jāhiliya*, p.109 によると *Khazāz* はバスラとメッカの間にある山で、ジャーヒリーア時代を通じて、最大の戦闘がここで行われた。北アラブはそれまでヤマンの南アラブと互角に戦えなかったが、この戦闘で初めて勝って、以後北アラブ優勢のままイスラーム時代を迎えた。この戦闘で先陣を率いたのは *Salmā b. Khālīd* というタグリブ族の勇士であった。

族に) 返してやる。”と告げた。

両部族はこの条件をうけいれ、王のもとで再会する日取りをきめた。王は側近たちに、

“タグリブ族は誰をよこしてこの件を訴えると思うか。”と尋ねた。一同は“彼らの詩人で、族長でもあるアムル・ブヌ・クルスウムでしょう。”と答えた。王が“ではバクル・ブヌ・ワーイル族は誰を。”と尋ねると、一同の意見はまとまらず、何人かの有力者の名をあげた。

すると王は、

“アッラーに誓って、そちらは間違っている。バクル・ブヌ・ワーイル族がよこすのは、他でもない耳の聞こえない老いぼれで何時も衣服の裾につまづくやつだが、貴人の沽券にかかわるとして先導役に肩にたくし上げさせるような人物に決まっている。”と言った。

さてその翌朝、タグリブ族はアムル・ブヌ・クルスウムに率いられて到着し、謁見の間に入った。他方、الحارث بن جِلْزَة al-Hārith b. Ḥilliza アルハーリス・ブヌ・ヒッリザは(バクル族に)、

“私は申し述べる口上を考えておいた。これを述べれば議論に勝ち、論敵をやりこめることが出来る。”と言い、幾人かの者に言い含めておいた。ところが、彼らが王の前に立ったとき王は彼らが口上を述べるのを好まぬ態度にでた。アルハーリス・ブヌ・ヒッリザは彼に代わって誰も口上を述べる事が出来ないのを知って、

“アッラーに誓って、私が王のもとに出向いて、王が7つの帳の向こう側で私に話しかけ、私が立ち去ると、私が立っていた跡に水をかけて清めるのは好むところではないが、——彼はハンセン病にかかっていた——しかしながら私の代わりに誰も口上を述べないのであればいたしかたない。皆のために耐えるとしよう。”と言って、王のところへ出向いた。アムル・ブヌ・クルスウムはアルハーリスを認めると、王に

“あのような者が私に議論をいどむのですか。己のラクダの馬具さえ付けられないような者ですぞ。”と言った。

王はこれに答えてアムル・ブヌ・クルスウムを黙らせた。するとアルハーリスは、

“アスマーウは近く分かれ行くとわれらに告げた。”と(彼のムアッラカを)詠み始めた。

彼は7つの帳の背後でこれを詠み始めたのであるが、これを聞いた王母ヒンドは思わず、

“アッラーに誓って、このような見事な言葉を7枚の帳の後ろから聞かされるなんて、このような日はかつて無かった。”と叫んだ。すると王は、“帳を揚げよ。”と命じ、王母が同じ事を繰り返し叫んでいるうちに帳はことごとく揚げられ、彼は謁見の間でじかに王と対面するところとなった。王

は自身の大皿の料理を詩人に振る舞い、詩人が立ち去った後も、水で清めないように命じた。ついで王のもとに留めていた70人のバクル族の男たちの前髪を切ってアルハーリスに引き渡した。また彼の長詩を唱える者には事前に沐浴をするように命じた。その後アムル・ブヌ・クルスウムが彼のムアッラカを詠んだ。

以上の二つの伝承から見ると、裁定ではアルハーリスが勝ったことになる。ではアムル・ブヌ・クルスウムの国王殺しの言い伝えは、となるが、裁定に敗れたアムルが王を恨んで、44行以下を詠み、そこから国王殺害の逸話が生まれたのではないかと推測することも出来る。

アムル・ブヌ・クルスウムのムアッラカは **كامل** *kāmil* カーミル調、93行（Aによる）よりなり、内容的には旅の部分を除く2部構成のカスィーダとなっている。すなわち、女性と酒をかたるナシーブ（序詩）の部分と自部族タグリブの栄光を詠んだ主題部分よりなる。部族の強勢、大胆さ、剛毅さ、祖先の高貴などを誇らかに謳いあげ、宿敵バクル族を脅し、アムル・ブヌ・ヒンド王に対して不服従の姿勢を表明している。いわゆる *fakhr* を主題とした典型的な長詩と言えよう。

قَصِيدَةُ عَمْرِو بْنِ كَلْثُومٍ

- | | |
|---|--|
| وَلَا تُبْقِي خُمُورَ الْأَنْدَرِينَا | ١- أَلَا هُبِّي بِصَحْنِكَ فَأَصْبَحِينَا |
| إِذَا مَا الْمَاءُ خَالَطَهَا سَخِينَا | ٢- مُشْعَشَعَةً كَأَنَّ الْخُصَّ فِيهَا |
| إِذَا مَا ذَاقَهَا حَتَّى يَلِينَا | ٣- تَخُورُ بِذِي اللَّبَانَةِ عَنْ هَوَاهُ |
| عَلَيْهِ لِمَالِهِ فِيهَا مُهِينَا | ٤- تَرَى اللَّحْزَ الشَّجِيحَ إِذَا أُمِرَتْ |
| مُقَدَّرَةً لَنَا وَمُقَدَّرِينَا | ٥- وَإِنَّا سَوْفَ نُدْرِكُنَا الْمَنَابِ |
| نُخَبِّرُكَ الْيَقِينِ وَنُخَبِّرِينَا | ٦- قِفِي قَبْلَ الْفَقْرِ يَا طَعِينَا |
| أَقْرَبَ بِهِ مَوَالِيكَ الْعِيُونَا | ٧- بِيَوْمٍ كَرِيهَةٍ ضَرْبًا وَطَعْنًا |
| لِيُوشِكَ الْبَيْنِ أَمْ خُنْتِ الْأَمِينَا | ٨- قِفِي نَسْأَلُكَ هَلْ أَحْدَثْتَ وَضَلًا |
| وَقَدْ أَمِنْتَ عُيُونَ الْكَاشِحِينَا | ٩- تُرِيكَ إِذَا دَخَلْتَ عَلَى خَلَاءٍ |
| تَرَبَّعْتَ الْأَجَارِعَ وَالْمُتُونَا | ١٠- ذِرَاعِي عَيْطَلٍ أَدْمَاءَ بَكْرِ |
| حَصَانًا مِنْ أَكْفِ اللَّامِسِينَا | ١١- وَتَدِيًا مِثْلَ حُقِّ الْعَاجِ رَخْصًا |
| رَوَادِفُهَا تَنْوُو بِمَا يَلِينَا | ١٢- وَمَنْنِي لَدَنِي طَالَتْ وَلَا نَتْ |
| رَأَيْتُ حُمُولَهَا أَضْلًا حُدِينَا | ١٣- تَذَكَّرْتُ الصَّبَا وَاشْتَقْتُ لَمَّا |
| كَأَشْيَافٍ بِأَيْدِي مُضْلِتِينَا | ١٤- وَأَعْرَضْتَ الْيَمَامَةَ وَاشْمَخَرْتَ |

أَضَلَّتْهُ فَرَجَعَتْ الْحَنِينَا
لَهَا مِنْ تِسْعَةٍ إِلَّا جَنِينَا
وَبَعْدَ غَدٍ بِمَا لَا تَعْلَمِينَا
وَأَنْظَرْنَا تُخَبِّرُكَ الْيَقِينَا
وَتُصَدِّرُهُنَّ حُمْرًا قَدْ رَوِينَا
عَصِينَا الْمَلِكَ فِيهَا أَنْ نَدِينَا
بِتَاجِ الْمُلْكِ يَحْمِي الْمُحْجَرِينَا
مُقَلَّدَةً أَعْنَتَهَا صُفُونَا
وَشَذَبْنَا قَتَادَةَ مَنْ يَلِينَا
يَكُونُوا فِي اللَّقَاءِ لَهَا طَحِينَا
وَلَهُوْثُهَا قُضَاعَةٌ أَجْمَعِينَا
عَلَيْكَ وَيُخْرِجُ الدَّاءَ الدَّفِينَا
نُطَاعِنُ دُونَهُ حَتَّى يَبِينَا
عَلَى الْأَخْفَاضِ نَمْنَعُ مَنْ يَلِينَا
وَنَحْمِلُ عَنْهُمْ مَا حَمَلُونَا
وَنَضْرِبُ بِالسُّيُوفِ إِذَا غُشِينَا
ذَوَابِلَ أَوْ بَبِيضٍ يَغْتَلِينَا
وَنُخْلِيهَا الرِّقَابَ فَيَخْتَلِينَا
وُسُوقًا بِالْأَمَاعِرِ يَرْتَمِينَا
فَمَا يَذْرُونَ مَاذَا يَتَّقُونَا
مَخَارِيقُ بِأَيْدِي لَاعِبِينَا
خُضْبَنَ بَارْجُوانٍ أَوْ طُلِينَا
مِنَ الْهَوْلِ الْمَشْبَّهِ أَنْ يَكُونَا
مُحَافِظَةً وَكُنَّا السَّابِقِينَا
وَشِيبَ فِي الْحُرُوبِ مَجْرَبِينَا
مُقَارَعَةً بَنِيهِمْ عَنْ بَنِينَا
فَنُصْبِحُ غَارَةً مُتَلَبِّبِينَا
فَنُصْبِحُ فِي مَجَالِسِنَا تُبِينَا
نَدُقُّ بِهِ السُّهُولَةَ وَالْحَزُونَا

١٥- فَمَا وَجَدَتْ كَوْجِدِي أَمْ سَقِبِ
١٦- وَلَا شَمَطَاءَ لَمْ يَتْرُكْ شَقَاهَا
١٧- وَإِنَّ غَدًا وَإِنَّ الْيَوْمَ رَهْنُ
١٨- أَبَا هِنْدٍ فَلَا تَعْجَلْ عَلَيْنَا
١٩- بَأْتَا نُورِدُ الرَّاياتِ بِيضًا
٢٠- وَأَيَّامٍ لَنَا غُرٌّ طَوَالِ
٢١- وَسَيِّدٍ مَعْشَرٍ قَدْ تَوَجَّهَ
٢٢- تَرَكْنَا الْخَيْلَ عَاكِفَةً عَلَيْهِ
٢٣- وَقَدْ هَرَّتْ كِلَابُ الْحَيِّ مِنَّا
٢٤- مَتَى نَنْقُلُ إِلَى قَوْمٍ رَحَانَا
٢٥- يَكُونُ ثِفَالُهَا شَرْقِيَّ سَلَمَى
٢٦- وَإِنَّ الضُّغْنَ بَعْدَ الضُّغْنِ يَبْدُو
٢٧- وَرَثْنَا الْمَجْدَ قَدْ عَلِمْتَ مَعْدُ
٢٨- وَنَحْنُ إِذَا عِمَادُ الْحَيِّ خَرَّتْ
٢٩- نُدَافِعُ عَنْهُمْ الْأَعْدَاءَ قِدَمًا
٣٠- نُطَاعِنُ مَا تَرَاحَى النَّاسُ عَنَّا
٣١- بِسُمْرٍ مِنْ قَنَا الْخَطِيئِ لُدْنِ
٣٢- نَشُقُّ بِهَا رُؤُوسَ الْقَوْمِ شَقًّا
٣٣- تَخَالَ جَمَاجِمَ الْأَبْطَالِ فِيهَا
٣٤- نَحْزُ رُؤُوسَهُمْ فِي غَيْرِ بَرٍّ
٣٥- كَأَنَّ سُيُوفَنَا فِيْنَا وَفِيهِمْ
٣٦- كَأَنَّ ثِيَابَنَا مِنَّا وَمِنْهُمْ
٣٧- إِذَا مَا عَيَّ بِالْإِسْنَفِ حَيٍّ
٣٨- نَصْبِنَا مِثْلَ رَهْوَةٍ ذَاتِ حَدٍّ
٣٩- بِفَتْيَانٍ يَرُونَ الْقَتْلَ مَجْدًا
٤٠- خُدْيَا النَّاسِ كُلَّهُمْ جَمِيعًا
٤١- فَأَمَّا يَوْمَ خَشَيْنَا عَلَيْهِمْ
٤٢- وَأَمَّا يَوْمَ لَا نَخْشَى عَلَيْهِمْ
٤٣- بِرَأْسٍ مِنْ بَنِي جُشَمِ بْنِ بَكْرِ

٤٤- بِأَيِّ مَشِيئَةٍ عَمَّرُوا بَنَ هِنْدٍ
 ٤٥- بِأَيِّ مَشِيئَةٍ عَمَّرُوا بَنَ هِنْدٍ
 ٤٦- تَهَدَّدْنَا وَأَوْعَدْنَا رُؤَيْدًا
 ٤٧- فَإِنَّ قَنَاتَنَا يَا عَمْرُو أَعَيْتَ
 ٤٨- إِذَا عَصَى الثَّقَافُ بِهَا أَشْمَازَتْ
 ٤٩- عَشَوَزَنَةً إِذَا انْقَلَبَتْ أُرْتُتَ
 ٥٠- فَهَلْ حُدَّتْ فِي جُشَمِ بْنِ بَكْرِ
 ٥١- وَرُثْنَا مَجْدَ عَلْقَمَةَ بْنِ سَيْفٍ
 ٥٢- وَرُثْتُ مُهْلِبًا وَالْخَيْرَ مِنْهُمْ
 ٥٣- وَعَتَابًا وَكُلْثُومًا جَمِيعًا
 ٥٤- وَذَا الْبُرَّةِ الَّذِي حُدَّتْ عَنْهُ
 ٥٥- وَمِنَّا قَبْلَهُ السَّاعِي كُلُّبٌ
 ٥٦- مَتَى نَعْقِدُ قَرِينَتَنَا بِحَبْلِ
 ٥٧- وَتُوجَدُ نَحْنُ أَمْنَعُهُمْ ذِمَارًا
 ٥٨- وَنَحْنُ غَدَاةُ أَوْقَدَ فِي خَزَارٍ
 ٥٩- وَنَحْنُ الْحَاسِبُونَ بِذِي أَرَاطَى
 ٦٠- وَنَحْنُ الْحَاكِمُونَ إِذَا أُطْعِنَا
 ٦١- وَنَحْنُ الثَّارِكُونَ لِمَا سَخَطْنَا
 ٦٢- وَكُنَّا الْأَيْمَنِينَ إِذَا التَّقِينَا
 ٦٣- فَصَالُوا صَوْلَةً فَيَمَنَ يَلِيهِمْ
 ٦٤- فَابُّوا بِالنَّهَابِ وَبِالسَّبَايَا
 ٦٥- إِلَيْكُمْ يَا بَنِي بَكْرِ إِلَيْكُمْ
 ٦٦- أَلَمَّا تَعْرِفُوا مِنَّا وَمِنْكُمْ
 ٦٧- عَلَيْنَا الْبَيْضُ وَالْيَلْبُ الْيَمَانِيُّ
 ٦٨- عَلَيْنَا كُلُّ سَابِغَةٍ دِلَاصٍ
 ٦٩- إِذَا وُضِعَتْ عَنِ الْأَبْطَالِ يَوْمًا
 ٧٠- كَأَنَّ مُتَوَنَّهُنَّ مُتَوْنُ غُدِرٍ
 ٧١- وَتَحْمِلُنَا غَدَاةُ الرُّوعِ جُرْدٌ
 ٧٢- وَرُثْنَاهُنَّ عَنْ آبَاءِ صِدْقٍ

نَكُونُ لِقَيْلَكُمْ فِيهَا قَطِينَا
 تُطِيعُ بِنَا الْوُشَاةَ وَتَزْدَرِينَا
 مَتَى كُنَّا لِأَمْلِكَ مَقْتَوِينَا
 عَلَى الْأَعْدَاءِ قَبْلَكَ أَنْ تَلِينَا
 وَوَلَّتْهُمْ عَشَوَزَنَةً زَبُونَا
 تَدُقُّ قَفَا الْمَقْفِ وَالْجَبِينَا
 يَنْقُصُ فِي خُطُوبِ الْأَوَّلِينَا
 أَبَاحَ لَنَا حُصُونَ الْمَحْدِ دِينَا
 زُهَيْرًا نِعَمَ ذُخْرُ الدَّاهِرِينَا
 بِهِمْ نَلْنَا ثَرَاتِ الْأَكْرَمِينَا
 بِهِ نَحْمِي وَنَحْمِي الْمَلْجَمِينَا
 فَأَيُّ الْمَحْدِ إِلَّا قَدْ وَلِينَا
 نَجِدُ الْحَبْلَ أَوْ نَقِصُ الْقَرِينَا
 وَأَوْفَاهُمْ إِذَا عَقَدُوا يَمِينَنَا
 رَفَدْنَا فَوْقَ رِفْدِ الرَّافِدِينَا
 تَسْفُ الْحِلَّةُ الْخَوْرُ الدَّرِينَا
 وَنَحْنُ الْعَازِمُونَ إِذَا عُصِينَا
 وَنَحْنُ الْآخِذُونَ لِمَا رَضِينَا
 وَكَانَ الْأَيْسَرِينَ بَنُو أَبِيْنَا
 وَضَلْنَا صَوْلَةً فَيَمَنَ يَلِينَا
 وَأَبْنَا بِالْمُلُوكِ مُصَفَّدِينَا
 أَلَمَّا تَعْرِفُوا مِنَّا الْيَقِينَا
 كَتَائِبَ بَطْعِنَ وَبَرْتَمِينَا
 وَأَسْيَافَ يُقَمِّنَ وَيَنْحِينَا
 تَرَى فَوْقَ النَّجَادِ لَهَا غُضُونَا
 رَأَيْتَ لَهَا جُلُودَ الْقَوْمِ جُونَا
 تُصَفِّقُهَا الرِّيَّاحُ إِذَا جَرِينَا
 عُرِفْنَ لَنَا نَقَائِذَ وَافْتَلِينَا
 وَنُورُثُهَا إِذَا مُتْنَا بَيْنَنَا

- ٧٣- وَقَدْ عَلِمَ الْقِبَائِلُ مِنْ مَعَدٍّ
 ٧٤- بِأَنَا الْعَاصِمُونَ بِكُلِّ كَحْلٍ
 ٧٥- وَأَنَا الْمَانِعُونَ لِمَا يَلِينَا
 ٧٦- وَأَنَا الْمَانِعُونَ إِذَا قَدَرْنَا
 ٧٧- وَأَنَا الشَّارِبُونَ الْمَاءَ صَفْوًا
 ٧٨- أَلَا سَائِلُ بَنِي الطَّمَّاحِ عَنَّا
 ٧٩- نَزَلْتُمْ مَنَزِلَ الْأَضْيَافِ مِنَّا
 ٨٠- قَرِينَاكُمْ فَعَجَّلْنَا قِرَاكُمُ
 ٨١- يَكُونُ ثِفَالُهَا شَرْقِيَّ نَجْدٍ
 ٨٢- عَلَى آثَارِنَا بَيْضٌ حَسَانٌ
 ٨٣- ظَعَائِنُ مِنْ بَنِي جُشَمِ بْنِ بَكْرِ
 ٨٤- أَخَذَنَ عَلَى بُعُولَتِهِنَّ عَهْدًا
 ٨٥- لَيْسَتَلْبُنَّ أَبْدَانًا وَبَيْضًا
 ٨٦- إِذَا مَا رُحْنٌ يَمْشِيْنَ الْهُوَيْنَى
 ٨٧- يَقْتَنُ حِيَادَنَا وَيَقْلُنَ لَسْتُمْ
 ٨٨- إِذَا لَمْ نَحْمِهِنَّ فَلَا بَقِينَا
 ٨٩- وَمَا مَنَعَ الظَّعَائِنَ مِثْلُ ضَرْبٍ
 ٩٠- إِذَا مَا الْمَلِكُ سَامَ النَّاسِ خَسْفًا
 ٩١- أَلَا لَا يَجْهَلُنَ أَحَدٌ عَلَيْنَا
 ٩٢- لَنَا الدُّنْيَا وَمَا أَمْسَى عَلَيْهَا
 ٩٣- بُغَاةَ ظَالِمِينَ وَمَا ظَلِمْنَا
 ٩٤- مَلَأْنَا الْبَرَّ حَتَّى ضَاقَ عَنَّا
 إِذَا قُبِّتْ بِأَبْطَحِهَا بُنِينَا
 وَأَنَا الْبَادِلُونَ لِمُجْتَدِينَا
 إِذَا مَا الْبَيْضُ فَارَقَتْ الْجُفُونَا
 وَأَنَا الْمُهْلِكُونَ إِذَا أُتِينَا
 وَيَشْرَبُ غَيْرُنَا كَدِرًا وَطِينًا
 وَدُعْمِيًّا فَكَيْفَ وَجَدْتُمُونَا
 فَعَجَّلْنَا الْقِرَى أَنْ تَشْتِمُونَا
 قُبَيْلَ الصُّبْحِ مِرْدَاةً طَحُونَا
 وَلَهُوَّتُهَا قُضَاعَةً أَجْمَعِينَا
 نُحَاذِرُ أَنْ تُقَسِّمَ أَوْ تَهُونَا
 خَلَطَنَ بِمِيسَمٍ حَسَبًا وَدِينَا
 إِذَا لَاقَوْا كِتَابَ مُعَلِّمِينَا
 وَأَسْرَى فِي الْحَدِيدِ مُقَرَّرِينَا
 كَمَا اضْطَرَبَتْ مِثْوَنُ الشَّارِبِينَا
 بُعُولَتُنَا إِذَا لَمْ تَمْنَعُونَا
 لَشَيْءٍ بَعْدَهُنَّ وَلَا حَيِينَا
 تَرَى مِنْهُ السَّوَاعِدَ كَالْقُلُوبِ
 أَبِينَا أَنْ يُقَرَّرَ الْخَسْفُ فِينَا
 فَتَجْهَلَ فَوْقَ جَهْلِ الْجَاهِلِينَا
 نَبْطِشُ حِينَ نَبْطِشُ قَادِرِينَا
 وَلَكِنَّا سَبَبُ ظَالِمِينَا
 وَنَحْنُ الْبَحْرُ نَمْلُؤُهُ سَفِينَا

1-乙女よ眠りから目覚め、われらに、さあ、朝酒を注いでくれ。アルアンダリーナ²⁾のぶどう酒をゆめゆめ余すではないぞ。

2) シリアのアレッポ南方一騎馬行程のところにあったブドウを多く産する村で後に廃墟になった。(ヤークート)

- 2-酒にお湯が混ぜられると、あたかもサフランが入っているように真紅に輝いている。
- 3-酒は要務を帯びる者の感情を和らげ、一度これを味わえば、要務さえ忘れさせる。
- 4-狭量にして貪欲な者も、酒が回されると、酔いしれて大度となり、おのれの金を蔑むようになる。
- 5³⁾ -死は必ずわれわれを捕らえる。これはわれわれの定めであり、われらに割り当てられたもの。
- 6-ハウダジに乗っている佳人よ、しばし立ち止まれ。われらはそなたに真実を、そなたはわれらに真実を伝えるであろう。
- 7-切り合い、突き合いが激しく交わされたあの忌まわしい戦いの日、そなたの従兄弟たちは、(勝利に) わいた。
- 8-止まれ、さすればそなたに尋ねるであろう。そなたは別れが近いゆえに逢瀬を計ったのか。それとも誠実な私を裏切つての試みか。
- 9-お前が隠れ場にいる彼女のところに忍び込めば、彼女はお前に見せよう。何故なら彼女は敵の目から安全なところに居るのだから。
- 10-砂地や石ころ混じりの土地で春草を食べた首の長い雌ラクダのような、ふくよかな両腕を見せよう。彼女は色白で未だ処女である。
- 11-また、彼女はお前に象牙で作った手箱のような軟らかな乳房を見せるが、触れようとする者から固く純潔を守っている。
- 12-彼女はしなやかですらりと伸びた体を見せるが、臀部のあたりは重々しい。
- 13-彼女のラクダが夕刻駆り立てられるとき、私は青春時代を思い出し、慕情の念にかられた。
- 14-アルヤマーマの村が高々と姿を現したが、それはあたかも鞘を払って振り上げた剣が林立しているようだ。
- 15-仔を失い、これを求めて悲哀の鳴き声を繰り返す雌ラクダの悲しみのほども(恋人と) 別れた私の悲しみには及ばない。
- 16-不運に襲われた9人の息子を失い埋葬をまぬがれなかった者とていない老婆の悲しみのほども、私の悲しみには及ばない。
- 17-今日も明日も明後日もそなたには分からない運命をもたらすであろう。
- 18-ヒンドの父⁴⁾ よ、われらを急ぎ立てるな、猶予を与えてくれれば、いずれ真実を伝

3) (A)の4行と5行の間に(Z)は次の3行を入れている。(T)にはこのうち上2行がはいっている。

وَكَانَ الْكَأْسُ مَجْرَاهَا الْيَمِينَا	صَبْنَتِ الْكَأْسَ عَنَّا أُمَّ عَمْرٍو
بِصَاحِبِكَ الَّذِي لَا تَصْبَحِينَا	وَمَا شَرُّ الْفَلَاتَةِ أُمَّ عَمْرٍو
وَأُخْرَى فِي دِمَشْقٍ وَقَاصِرِينَا	وَكَأْسٍ قَدْ شَرِبْتُ بِبَعْلَتِكَ

おお、ウンム・アムルよ、そなたはわれらに酒盃を許さなかった。
杯は右回りに回されていたのだが。(そなたが途中で左回りに変えた。)
ウンム・アムルよ、そなたが朝酒を振舞わなかったそなたの友は、
3人のなかで最悪人ではないのに。
私はなんと多くの酒盃をバアラバックで空け、
またダマスクスとカーシリーナで空けたことか。

4) ヒンドの父とは عمرو بن المنذر الأكبر بن النعمان الأكبر بن إمروء القيس بن عمرو بن عدى
al-Mundhir al-Akbar b. al-Nu'mān al-Akbar b. 'Imru' al-Qays b. 'Amr b. 'Adiはすなわち عمرو بن هند
Amr b. Hind をさす。

えるであろう。

- 19-すなわち、われらは白い戦旗を掲げて戦鬨に突入し、流血でそれを赤く染めて持ち帰るのだ。
- 20-長期にわたる輝かしい戦鬨の日々を伝えよう。その間、われらは王への服従を拒み、反旗をひるがえした。
- 21-人々に王冠を被せられた多くの長たる者は庇護を求め来る者を守るものだ。
- 22-われらは彼を取り巻いて軍馬を立ち止まらせ、手綱を首に巻いて3本足で立たせ、1本の足は休ませた⁵⁾。
- 23-部族の犬どもがわれらに向かって遠吠えした。われらは近くの敵を打ち破った。
- 24-われらが戦いの臼のある部族に対して動かすと、彼らは出会いがしらに粉々に粉碎される。
- 25⁶⁾ -臼の敷き革(戦場)はサルマー(ネジド)⁷⁾の東に及び、粉にひくひと掴みの穀物はクダーア族全員である。
- 26-積もり積もった憎悪の念がお前に湧き上がり、心に秘めた病を引き出す。(復讐をけしかける。)
- 27-われらは父祖伝来の栄光を引き継いでおり、北アラブはこの事をよくわきまえている。われらはこの栄光を守るために敵を刺すのである。
- 28-部族のテントの支柱が家財の上に崩れるときには、われらは隣人たちをしっかりと守る。
- 29-古来われらは彼らを敵から守り、彼らがわれらに背負わせた(血債や復讐)を背負ってやった。
- 30-敵がわれらと離れていればわれらは槍で刺し、近くに寄せてくれば剣で斬りつける。
- 31-われらはハット産⁸⁾の褐色で、しなやかで、しかも乾ききっていない槍で突き、あるいは白刃を頭上に振りかざす。
- 32-われらはそれで戦士らの頭を裂き、彼らの首をまるで大鎌で草を刈るように切り離す。
- 33-あなたは勇士らの大きな頭蓋骨を見て、石ころの多い地面に落ちているラクダの荷物かと思うであろう。
- 34-われらは情け容赦なく彼らの首を切り落とし、彼らはわれらから身を守るすべさえ知らない。
- 35-敵と味方のあいだで連打するわれらの刃は、遊びに興じる子らが手にして振るより合わされた布切れのようである。
- 36-われらと敵の着衣は(血しぶきのため)ウルジュワーン⁹⁾染料で赤く染められたか、塗りこめられたようである。
- 37-部族が見当もつかない恐怖にとらわれて、前進ができなくなると、何時でも
- 38-われらは山上が鋭く切り立つラフワ山のような軍馬を整えて、守りを固めておい

5) (Z)はヒンド王を殺して、軍馬がこれを取り巻いて休息姿勢に入った、と解説している。

6) (A)では25行目が81行に再登場するが、(T) (Z)では25行目にあるのみ。

7) (A)のみがサルマーとしており、(T) (Z)は نَجْد Najd ネジドとしている。

8) ハット الحِث al-Khatt は諸説あるが、多分バハレーンの港町でここにインドから輸入した槍の市場があったものと推定される。

9) أرْجُوَان urjuwān とはベルシャ語 arqavan ハナズオウ(染料用植物)

て、先制攻撃する。

39-戦闘での死を名誉とみなす若者や、戦闘の経験豊かな白髪混じりの戦士らをくりだす。

40-われらはすべての人々と争い、われらの子らを守るために彼らの子らを剣で打つ。

41-われらの子らの身をあんずる日には、朝から戦備を整えて襲撃にうつる。

42-彼らの身をあんじなくてもよい日には、朝三々五々に部族の集まりに加わる。

43-われらはジュシャム・ブヌ・バクル¹⁰⁾ 族の長をいただき、硬軟いずれの土地をも踏みにじる。

44 ¹¹⁾ -アムル・ブヌ・ヒンドよ、いかなる意図のもとに、われらが汝の小国の王の僕になるであろうか。

45-アムル・ブヌ・ヒンドよ、いかなる意図のもとに、われらの中傷する者達に意を払い、われらを軽蔑するのか。

46-われらを脅迫し、威嚇するのであれば、手加減してかかれ。一体われらは、何時汝の母の僕になったか。

47-アムルよ、汝より前にわれらの槍は、これをなまくらにしようと計った敵の試みをくじいたぞ。

48-槍を正す万力が、(われらの) 槍を鉄むと、嫌気がさし、けり癖のあるラクダを思わす強い槍を忌避する。

49-この強豪な槍を矯正しようとするれば、槍は音を立てて、矯正者の首と額に跳ね返る。

50-汝はジュシャム・ブヌ・バクルについて、昔、戦いにおいて落ち度があった、と伝えられているのか。

51-かれらはアルカマ・ブヌ・サイフ¹²⁾ の栄光の相続者。彼は栄光の砦をわれらに従順なものとして授けた。

52-私はムハルヒル¹³⁾ の、また誰よりも優れたズハイルの後継者だ。貯える者の至上の宝ぞ。

53-アッターブとクルスウム¹⁴⁾、彼らすべてからわれらは貴人らの遺産をえているのである。

54-さらに汝が伝え聞いているズウー・アルブラ¹⁵⁾ の後継者でもある。われらは彼によって守られ、彼によってわれらは身を寄せる者たちを守るのである。

55-彼より前の、クライブ・アッサーイー (努力家クライブ¹⁶⁾) もわれらゆかりの者。一体、われらが持ち合わせない栄光が他にあるうか。

56-われらが戦列でラクダを他のラクダと綱で結ぶとき、われらはその綱を切るか、ま

10) مُضَر Muḍar ムダル系の部族。

11) (T)では44行目と45行目が逆に配置されている。

12) 詩人と同属の人物に違いないが、詳細不明。

13) مَهْلُـلُ بْنُ رَبِيعَةَ التَّغْلِبِيِّ Muḥalhil b. Rabīʿa al-Taḡhlībīのこと。彼の兄弟 كُـلَيْبُ Kulayb が殺されたのがもとでバクルとタグリブのあいだで長期にわたるバスースの戦いが続いた。また彼は最初にかスィーダを作った詩人とされている。アムル・ブヌ・クルスウムの母方の祖父にあたる。ズハイル Zuhayr b. Jusham は詩人の父方の祖父。

14) アッターブは詩人の曾祖父、クルスウムは詩人の父。

15) كَعْبُ بْنُ زُهَيْرٍ Kaʿab b. Zuhayr をさす。彼の鼻には固い毛が環状に生えていたために付けられたあだ名。

16) クライブとはムハルヒルの兄弟クライブ・ブヌ・ワーイルのこと。

- たはつなぎ相手のラクダの首を折る¹⁷⁾。
- 57-われらは守るべきものを最も堅固に守り、盟約を結べばこれに極めて誠実な者と見なされている。
- 58-われらはハザーズ¹⁸⁾の地で戦火が燃え上がった朝、他をはるかに越える軍勢で応戦した。
- 59-われらは（味方を支援するために）ズー・ウラータ¹⁹⁾の地にラクダをとどめ、ミルクがよく出る雌ラクダには、枯れ草を食べさせて、耐えた。
- 60-われらは、従う者をよく守るが、背く者は、断固として容赦はしない。
- 61-われらは嫌いなものは捨て置き、好ましいものなら思いのまま手に入れる。
- 62-われらは敵と遭遇したとき、右翼に陣を構え、父の子らが左翼を固めていた。
- 63-彼ら（バクル族）は近づく者を攻め、われらも寄せる敵を攻め立てた。
- 64-彼らは戦利品や捕虜を捕らえて引き上げ、われらは王侯らに足かせをはめて引き揚げた。
- 65-バクル族よ、用心には用心を重ねよ、お前たちにはわれらの正体がまだ分からないのか。
- 66-お前たちはわれらとお前たちの軍勢が、どのようにして突きあい、弓矢を交わしたのか知らないのか。
- 67-われらは兜をかぶり、ヤマン製の楯で身を固め真っ直ぐでよくしなう剣を帯びていた。
- 68-われらは長くきらめく鎧をまとい、剣のつり革は幅広く、しわがあるのを見るであろう。
- 69-鎧を勇士らが脱ぐ日には、（長く着ていたために）彼らの皮膚が黒く錆びているのに気がつくであろう。
- 70-鎧表のひだは、風が淵の水面に当たって作り出すさざ波のようである。
- 71-戦いの朝われらを運ぶのは短毛の駿馬、戦利品として奪い、われらのもとで乳離れした馬である。
- 72-それらは誠実な父祖からわれらが受け継いだ馬であり、われらが死ねば、せがれ達に引き継がせる。
- 73-マアッドの全部族は、大型のテントが谷あいの川床に立てられるときには、よく知っている。
- 74-すなわち、われらは苦難な年の保護者であり、求める者達に与える者であることを。
- 75-また、剣が鞘から抜かれるときには、われらが近隣の者達の守り手であることを。
- 76-われらは力があるときには、恩恵を施し、攻撃されれば、敵を殲滅させる。
- 77-われらは清らかな水を飲むが、他の者達は濁った泥水を飲む。
- 78-おお、バヌー・アッタンマーフとドウミー²⁰⁾に伝えよ、“お前たちはわれらをどのような者と見たか”と。
- 79-お前たちは客としてわれらを訪れたので、われらは急ぎ接待して、中傷するいとまを与えなかった。

17) 戦場で他部族と交戦するとき、相手を屈服させるの意。

18) ハザーズについては、注1)を参照。

19) 水場のあった地名。

20) ともに北アラブの ^{بلي} ʿIyād イヤード系の部族。

- 80-お前たちを客として迎えたが、(実は戦いを挑んできたと分かったので) 夜明け前
お前たちを粉砕する強固な白石でもてなした。
- 81-臼の敷き革(戦場)はサルマー(ネジド)の東に及び、粉にひく一掴みの穀物はク
ダー族全員である。
- 82-われらの背後には美しい貴婦人らがついて来ていた。われらは彼女らが分捕られた
り、侮辱されないようにと警戒した²¹⁾。
- 83-ジュシャム・ブヌ・バクル族のラクダの駕籠に乗った女性たちは美貌に加えて出自
がよく、信仰心に厚かった。
- 84-彼女らは夫達から、標識をつけた敵の軍勢と遭遇するときには、必ず守り抜くとの
誓約を得ている。
- 85-すなわち、彼らは敵の鎧や刀を奪い、捕虜達は鉄の枷にはめるのである。
- 86-彼女らが緩やかに歩むさまは、よいどれがゆれ歩くさまににている。
- 87-彼女らは馬に飼い葉を与えながら“私たちを守ってくれないなら、あなたたちは私
らの夫ではない”と言う。
- 88-われらが彼女らを守らなかったなら、われらは生き残れないであろう。彼女らのあ
と如何なるもののためにも生きることはない。
- 89-女性を守るには、一撃に勝るものはない。子供が回し飛ばす木片のように、その一
撃で敵の腕が切り飛ばされるのを見るであろう。
- 90²²⁾-もし王が人々に圧政を強いるとしても、われらにこれを加えるのは断じて許さ
ぬ。
- 91-それゆえ、如何なる者にもおろかにも、われらに齒向かわせるな。われらは愚か者
の無知を超える懲罰を加えるであろう。
- 92-この世と、その中で暮らす者すべてはわれらのもの。われらは攻めるとなれば、力
攻めする。
- 93-われらは抑圧したことはないのに、抑圧者、圧政者と呼ばれている。だがそろそろ
抑圧に取り掛かろう。
- 94-われらは陸を満たし、それらがわれらには狭いものとなった。われらは海原を船で
満たすであろう。

21) ジャーヒーリーア時代のアラブは婦女子を戦場に連れてくるのが通例であった。

22) (T)では92,90,93,-,94,91の順に配置されており、93行目と94行目のあいだに次の一行があるが、
(A)にはこれが欠けており、(Z)は最後の行に置いている。なお、(A)は91行が最後の行としてい
る伝承者が多く、92,93,94行を付け加えている者は一部だ、と述べている。

إِذَا بَلَغَ الْفِطَامَ لَنَا صَبِيٌّ تَنَجَّرُ لَهُ الْجَبَابِرُ سَاجِدِينَ
われらの子らが離乳期を迎えると、圧政者どもはひざまずいて伏し拝む。